

◆歴史街道を行く◆
熊野街道協道

大塔村水呑峠

果てしない海原に囲まれ、しかし、
背に負うのは幾重にも重なる山また山。
人が足を踏み入れることを拒むかのような険しく深い山並み。
それゆえ紀州熊野は、神秘の国として
長い歴史の中で人々のあこがれの地であり続けました。
数多く残る熊野伝説の中から、
決して表舞台に出ることはなかったけれども、
数百年以上の時を超えて深山幽谷の地、大塔村に伝えられている
もうひとつの伝説を辿ります。

住吉神社本殿

大塔宮護良親王の熊野落ち諸説

時は中世、南北朝へといたる乱世の時代のことです。

権力を強め、専制化を進める北条氏に武士層の支持は失われつつあり、また二つに分裂していた皇統の対立など、不穏な時代を予感させた鎌倉幕府末期。大塔宮護良親王は1308年(延慶元年)、後醍醐天皇の皇子として生まれます。

彼は鎌倉幕府の意向に沿い、元服の儀を行わずに、門跡として比叡山延暦寺に入りますが、その様子は「一を聞いて十を知るたくいまれな御器量、真理を把握して即座に仏智となす才能は花と聞いて…」といわれるほどに才知・人望に優れた人物であったようです。

1331年8月、比叡山は幕府軍の攻撃を受け、親王は楠正成の赤阪城(現、大阪府千早赤阪村)へと逃れます。

同10月、赤阪城落城。親王は熊野をめざし落ちていきます(太平記「大塔宮熊野落事」)。なぜ、熊野へ逃れたのかについては、高野山に拒まれたための窮余の策であった説、また楠正成の叔母が近露村(現、中辺路町近露)の豪族、野長瀬氏に嫁いていたためとする説(滝川政次郎著「熊野」)などがあります。

また、熊野への行程についても紀伊の海岸線から切目王子を経て熊野古道の中辺路から熊野本宮へと向かう行程(清水孝教・木村鷹太郎著「十津川郷土誌」)、また奈良の吉野か五条あたりから天川峠を越え十津川の奥の北山をめざしたとの説(大西源一著「大塔宮熊野落考」)など諸説あります。多くは切目川に沿って東進し、現在の龍神村の柳瀬荘から十津川に至った「紀伊統風土記」の説を重視しているようです。これらの説に対し、大塔村に残る大塔宮熊野落の伝説を辿ってみましょう。

熊野古道の裏道を辿る隠密行程 鮎川から水呑峠、そして静川へ

親王の熊野落ちの諸説について、追手の目をくらすためには隠密行動であり、いわゆる「影」による偽装工作だったのかもしれませんが、しかし、大きな街道を避

●「信仰の山会議」熊野地域視察

2001年9月5日から和歌山市で開かれているユネスコ世界遺産関連の専門家会議「信仰の山会議」の出席者らが、熊野本宮大社など熊野地域の視察を行った。「紀伊山地の霊場と参詣道」に含まれる熊野、高野地域の世界遺産への登録を目指す。



一ノ瀬王子跡



くまの道標誌



鮎川王子社



水呑峠付近の熊野街道脇道



水呑隧道



宮代城跡



御所平

け、人里離れた山路を辿ったことは想像にかたくありません。

大塔村に残る親王の足跡とは、切目川沿いの集落、印南町上洞から南下し、田辺市上芳養の日向から馬我野を経て大塔村鮎川に出る裏古道の経路です。それぞれの地には、大塔宮親王にまつわる伝説が残されていますが、たとえば、馬我野という地名は、この地に辿り着いた大塔宮が疲れた馬を放ち、労をねぎらったことに由来するといわれています。

さて、1331年(元弘元年)、親王一行は鮎川王子に着きます。ここから一行は、水呑峠を経て下川下からさらに奥地へ、安川溪谷を溯り、熊野本宮を仰ぐ村、静川へと経路をとっていきます。

深山幽谷の地に残る数々の伝説

大塔宮の足跡を偲びながら、今も残る伝説の数々を拾ってみましょう。

大塔宮の従者で先導役をつとめていた侍が、小川のヒヨというところで空腹と疲労のため行倒れたといひ、それを祀る小さな祠がひっそりと残っています。

また、大塔宮が鎌倉で殺された後、隠れ人(課報者)も処刑されますが、村人が山の中に墓を建て祀ってきたという、三人武士の墓。小川地区に伝承されている盆踊りは大塔宮を供養するためのものといわれています。

小川の剣神社は大塔宮を祭神とし、親王の御剣を神体としていますが、この由来は、小川に夜毎光るものがあり、村人たちは大いに恐れますが、大塔宮の剣であることを知り、これを祀ったというものです。この神社は明治40年に住吉神社に合祀されています。また、安川には剣神社跡がありますが、これは親王が京都に還るにあたり、家臣に剣を遺したが、家臣の子孫が鮎川村に転じるにあたり、剣の柄を遺したとされる柄塚が下川下に残っています。

餅つかぬ里と水呑峠の由来

鮎川・小川の村は「餅つかぬ里」と呼ばれています。山伏の姿に身を変え、険しい悪路を越え鮎川に辿り着いた護良親王の一行は、空腹に耐えかねていました。折りから、村は収穫を祝う亥の子祭りで、家々では餅をつき、軒には粟餅が吊るされていた。「せめてこの餅を…」と家臣は村人に食べ物求めます。しかし、すでに村には「落人には食をあたえてはならぬ」という幕府の厳しいお触れがいきわたっており、どの村人もかぶりをふるばかり。一行は一片の餅すらも手に入れることができませんでした。さて落人の身の如何ともし難く、谷水に空腹を凌いだという言い伝えに、その名を残す水呑峠の由来です。後日、あの山伏たちが親王の一行であったことを知った村人たちは大いに恥じ、悔い、爾来、餅をつくことをやめてしまい、「餅つかぬ里」と呼ばれるようになります。

おもしろいことに、この「餅つかぬ里」伝説は「紀伊統風土記」で親王が辿ったとされる切目から十津川に至る街道沿いの諸村にも残っています。

1333年、宮は十津川から吉野に移ります。同年、吉野城落城。翌年(建武元年)、後醍醐天皇による建武の新政が始まりますが、政争にまきこまれた大塔宮は捕らわれ、鎌倉に幽閉されてしまい、ついには殺されてしまいます。

この後も、世は平安からは程遠く、建武の新政に失敗した後醍醐天皇は吉野に逃れ、南北朝の対立が深まっていきます。

権力を求める政争の世にあって、運命に翻弄された大塔宮の物語は、鄙びた山村の風景に哀しくも華やかな彩りを感じさせてくれます。

資料協力:大塔村 www.aikis.or.jp/~otomura/

*豊かな自然に囲まれた大塔村は、登山、ハイキング、溪流釣りなど四季折々の喜びが感じられる村。閑静な山里で心身ともにリフレッシュできる温泉「乙女の湯」や自然と伝統を生かした祭りや都会の人との交流施設など、健康で環境にやさしい村づくりがすすめられています。



前神社



餅つかぬ里/大塔宮御駐跡



大塔屋敷跡

コラム

「600年目の餅つき」

昭和10年夏の各新聞には、「餅つかぬ村」大塔村が600年ぶりに餅つきを再開したという記事が載っている。これは7月25日京都嵯峨大覚寺における護良親王600年御遠忌法要、また鎌倉宮で8月13日から3日間行われる600年大祭に、鮎川村代表らが参列。その際、600年の風習を破り、はじめて餅をつき、これをお供えし過去の許しを乞うというもの。村ではこれを機に正月の餅つきの行事が再開したという。

(注) 昭和31年、富里村・三川村・鮎川村の三村が合併、大塔村となる。